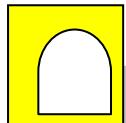


日吉台地下壕保存の会会報



第118号
日吉台地下壕保存の会

戦争遺跡全国シンポジウムの意義について

運営委員 亀岡敦子

2014年8月16日から18日の3日間、第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会が、川崎市多摩区にある明治大学生田キャンパスを会場にひらかされました。キャンパスは小高い丘の上にあり、戦時中は陸軍登戸研究所が置かれていた場所で、戦後広大な敷地を建物も含めて明治大学が入手したものです。3年前に第15回大会を開いた慶應義塾日吉キャンパスは、戦中は海軍が戦後は連合軍が使用していた歴史を持っています。会場がそのまま戦争遺跡であるという、ともに戦跡保存の大会にふさわしい場所であり、大学ならではの設備の整った部屋を使用させていただきました。そのうえ交通の便にも恵まれています。

全国大会は本来全国各地に会場を移して開催するのが理想でしょうが、戦争遺跡は残っていても、その調査研究と保存に取り組む研究者や市民団体はそれほど多くはありません。その点、私たちは毎年のように「横浜・川崎平和のための戦争展」を開いている気心の知れた仲間がいるので、大会開催は大変ではありましたが、そう気負うことなくできたのだと思います。現地実行委員会は、日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、中原空襲・戦災を記録する会のメンバーと、それに繋がる人たちです。その上に明治大学の大学院生と登戸研究所資料館の学芸員、法政二高の教員といった若い力が加わりました。記念講演や分科会報告は実に多彩で、内容が深く、聞きごたえがありますし、その場に来なければ見られないフィールドワークは、毎年参加者に大好評です。今年も5か所の見学地を約200人の人たちが訪れました。

戦争の歴史を語る証人としての「モノ」の役割はますます重要になっているのとは裏腹に、肝心の「モノ」の多くが調査される前に消えてしまうのが実情のようです。一度壊れたものは、歴史の証人と呼ぶことは難しいかもしれません。

年に一度の全国シンポジウムだけではなく、もっとフットワークを軽く、そして連携を密にした、ネットワークの活動があるような気がします。開催の困難さのみ強調されますが、シンポジウムがあるからこそ見えてきた別の面を、皆で知恵を出し合って、育てていけないものかと考えています。

目 次

巻頭言 戦争遺跡全国シンポジウムの意義について 亀岡敦子	1p
報告 全国シンポジウム写真展示・新聞記事 喜田美登里	2p
お知らせ 第9回公開講座 小沼通二(慶應義塾大学名誉教授) 「地下壕の時代・青空に時代」	3p
お知らせ 第9期ガイド養成講座	4p
お知らせ 港北図書館パネル展示・講演会 小山信雄	4p
投稿 「東京大空襲と第五福竜丸事件を考える」 金子憲	5~6p
報告 日吉フェスタ2014に参加して 小山信雄・上野美代子	6~7p
報告 地域のチカラ応援事業中間報告会 小山信雄	7p
報告 聞取り調査元通信兵大島久直氏 山田謙・淑子	8p
転載 楽・遊・学 わがまち港北第188回 「日吉台地下壕の現在・過去・未来」林宏美	9~10p
報告 ガイドから一言 海外留学生をガイドして 長谷川崇	10p
連載 日吉第一校舎ノート(6) 阿久沢武史	11~13p
連載 地下壕設備アレコレ【その13】 山田謙	13p
書籍紹介 『大学における戦没者を考える』 『「戦場体験」を受け継ぐということ』『わがまち港北』	14p
お知らせ 川口先生と歩く見学会	14p
日常の活動より	15p
活動の記録	16p

報告

全国シンポジウム写真展示〈 平和のための戦争遺跡の保存を求めて 〉

7/16~10/26 明治大学平和教育登戸研究所資料館

運営委員 喜田美登里

第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会の関連イベントとして、全国の戦争遺跡の写真展示〈平和のための戦争遺跡の保存を求めて〉が7月16日から10月26日までの約3か月半開催された。登戸研究所資料館の廊下に戦争遺跡保存全国ネットワーク参加団体のうち、17団体の写真・資料パネルを展示了。開催期間中に登戸研究所資料館を訪れた多くの方に見て頂けたかと思う。

「全国の戦争遺跡」紹介の写真展示は毎年全国シンポジウム会場で実施しているが、今回は各団体にA3版3枚の資料の提供を呼び掛けて、現地実行委員会が新たに作成した。

ネットワーク参加団体から更に資料を寄せて頂いて戦争遺跡保存のための巡回展示として活用できればと願っている。

新規参加団体として、「旧陸軍桶川飛行学校を語りつぐ会」「筑波海軍航空隊記念館」

「静岡県島田市第二海軍技術廠牛尾実験所跡地」のパネルも加わっている。

戦跡保存ネットワークの皆様、ご協力ありがとうございました。

★目吉台地下壕紹介の新聞掲載等

- ・日本経済新聞 8/9 「文化」 戦争語る遺跡 次世代へ保存 市民運動全国に拡がる
 - ・朝日新聞 8/11 夕刊「各駅停話」 東急東横線日吉 慶應大、眠る戦争遺跡
 - ・産経新聞 8/16 戦跡をゆく 69回目の夏⑤ 元暗号兵「負けを覚悟していた」
 - ・「のんびる」8月号（パルシステム生協）「戦争遺跡のガイド
養成講座」体験！

★全国シボジウム神奈川県川崎大会・戦争遺跡保存関連記事

- ・東京新聞 8/13 消される戦争の跡戦争遺跡 3万カ所保護
わずか216件

8/14～⑨回 戦争遺跡を訪ねて 戦後 69 年かながわ・

8/17 戦争遺跡 保存と活用 多摩区の明大シンポ始まる

- ・産経新聞 8/12～16⑤回 戦跡をゆく 69回目の夏・8/14
「戦跡を文化財に…」16日からシンポ開催

- ・毎日新聞 8/16 戦後 70 年を前に 1 都 3 県痕跡を訪ねて
川崎市登戸研究所 他

- ・神奈川新聞 8/12 戦争遺跡守るには 文化庁報告書「未刊」で保存に課題

8/13 語りつぐ戦後 69 年 市民団体 登戸研究所絵本で紹介 他

- ・日本経済新聞 7/30 戦後70年を前に 守れ無言の証人
 - ・読売新聞 8/17 戦争遺跡保存訴える 川崎で全国初の記念碑

★掲載記事すべてはチェックできないが、「戦後70年を前に」の特集記事が多い



写真展示 登戸研究所資料館

戦争遺跡 保存と活用

多摩区の明大シンボル始まる
戦争遺跡の保存・活用
遺跡保存全国シンボンボシムが十六日、川崎市立摩区の明治大生田キャンパスをスマー会場に、間の日程で会場までの主催する戦争遺跡保全ネットワークの主導で、駿駿・武共同代表が、全国の戦争遺跡を紹介しながら、文化財として保存する意義を説いた。戦後記念のため、戦争遺跡を撤去されてしまうもののが多いのが実情だが、右側



中の平和がアジアの平和につながる。大の姿を見せ合い、理に沿ひ、お互い努力することが必要」と訴えた。キャババス内にある研究所所長は、造形作家武田美通さん（埼玉県蕨市）が鉄で骨骼の兵士を表現した「戦死者からのメッセージ」の七作品が展示された。空腹で靴をむき、つたり、鎧剣を差さざる迫力ある作品群で、「見てる者の心は何をやっているのかと問う掛けられている気分になれた」と話す人もいた。（平木友貴子）

東京新聞(2014.8.17)

第9回 地下壕保存の会 公開講座のお知らせ

地下壕の時代、青空の時代



日本では、69年前の8月15日に、地下壕が不要になり、14歳の私が青空を見ていてよい時代になった。それ以前を振り返り、それからの時代を思い起こし、現在とこれからの日本と世界を考える。

講 師：小沼 通二（こぬまみちじ）

慶應義塾大学名誉教授 物理学者（素粒子理論）

日 時：2015年1月31日（土）午後1時～3時

会 場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎大会議室

主 催：日吉台地下壕保存の会

後 援：港北区（港北区地域のチカラ応援事業）

誰でも参加できます。参加費は無料、

事前予約不要です。

ガイド養成講座関連事業です。

講師プロフィール：1931年東京生れ
専門は物理学（素粒子理論）湯川秀樹、
朝永振一郎らに薰陶を受ける。慶應義塾
大学名誉教授、神奈川歯科大学理事、
世界平和七人委員会委員・事務局長。日本
学術会議原子核特別委員会委員長、日本
物理学会会長、アジア太平洋物理学会連
合会長、ノーベル平和賞受賞時のパグウ
オッシュ会議評議員などを務めた。ハン
ガリー科学アカデミー名誉会員。『湯川
秀樹日記』編（朝日新聞社）・『アジアの
核と私たち』共著（慶應義塾大学出版会）
ほか多数

☆世界平和アピール七人委員会とは、1955年
結成された知識人による平和問題に関する
意見表明のための会。世界的に平和運動
を行いうる、政治家以外の民主主義的
考えを持つ7人の委員で成り、講演活動
など活発に発言している。

☆パグウォッシュ会議とは、全ての核兵器お
よび全ての戦争の廃絶を訴える科学者による
国際会議。1957年、ラッセルとアイ
ンシュタインの呼びかけに応えた11人の
著名な科学者により創立。カナダのパグ
ウォッシュで会議が開かれた。日本から
は湯川秀樹・朝永振一郎・小川岩雄が参
加。1995年ノーベル平和賞受賞

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

毎年2000名余りの見学者が訪れる戦争の遺跡・日吉台地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨な戦争をくりかえさないために活用していくにはガイド活動が不可欠です。物言わぬ遺跡にガイドの案内を加えて歴史を語ってもらいます。この活動をいっしょにやってみませんか？

第9期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

第1回 1月17日(土) 慶應大学日吉キャンパス 来往舎中会議室 13時～15時半
 《ガイド活動の概要》 日吉台地下壕・日吉台地下壕保存の会の活動について ガイド講座修了者の体験・感想

☆ 地下壕見学会(保存の会が毎月行っている定例見学会に実習として参加していただきます。) 1月24日(土) 日吉駅集合 13時～15時半

第2回 2月28日(土) 来往舎中会議室 10時～12時

《体験者の話を聞く》 元通信兵・理事生など

☆ 地下壕見学会 2月28日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時半～16時

第3回 3月14日(土) 来往舎中会議室 13時～15時半

《ガイド活動の実際》 ガイドのポイント・用語解説・出典・見学会の実際

☆ 地下壕見学会 3月28日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

第4回 4月11日(土) 来往舎前集合 10時～12時・昼食後 13時～15時半

《フィールドワーク》 日吉駅西側艦政本部周辺・日吉キャンパス地下壕周辺

☆ 地下壕見学会 4月25日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

第5回 5月9日(土) 来往舎中会議室 13時～15時半時半

《まとめ》 見学対象者別のガイドの実際・フリーディスカッション・修了証授与
 定員 30名(高校生以上) 参加費 2000円(全5回分) 見学会は各回300円(保険料)
 申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、

下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。〆切 1月10日(土)

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443(午前・夜間)

主催 日吉台地下壕保存の会

後援 港北区役所 ☆この企画は地域のチカラ応援事業の助成を受けています

お知らせ 港北図書館でパネル展＆講演会を開催します！ 運営委員 小山信雄

12月1日(月)から1ヶ月間、港北図書館のご協力を頂き、菊名の横浜市港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”にて“日吉台地下壕パネル展”を開催することになりました。このコーナーは今年3月のリニューアル時に新設されたもので、“懐かしの東横線駅舎や新横浜開業50周年の写真展示会”“よこはまウォーキングポイント”などなど、毎月のように様々なテーマの展示会、講演会が開かれています。戦争に関するものはほとんどなかったようですが、港北区に残る貴重な戦争遺跡について、少しでも多くの方々に知っていただき、戦争や平和について見つめなおす一助になればと思います。12月7日(日)10時から講演会も行いますので、多くの方の参加を期待しています。

投稿

「東京大空襲と第五福竜丸事件を考える」

東京の戦争遺跡バスツアーに参加して

日吉台地下壕保存の会会員 金子 憲

今回の東京戦争遺跡バスツアーでは「夢の島」の由来と、なぜ「第五福竜丸」がこの地に置かれているのか、に強い関心を持って参加させてもらいました。

そこでなぜ「夢の島」と呼ばれるようになったのか、について調べましたところ 1940 年代の初め、東京湾に飛行場を作るためこの地を埋め立て始めたが、太平洋戦争によって中止された。戦後間もないころ遊園地などが計画され、それがいつの間にかマスコミが「夢の島」と呼ぶようになったらしいです。

ところが 1950 年代後半から 10 年間にわたって都内のゴミ捨て場として埋め立てられ「夢の島」から「ゴミの島」になってしまったが、そのごみ問題も長期の交渉により変更展開され 1970 年代中期に、東京都立夢の島公園の名称で開園され「ゴミの島」が正式に「夢の島」になったと言うことです。

たしかに 1970 年代後半頃、房総半島上空から東京湾に向かって高度を下げ始め、羽田空港に着陸するとき機中の窓から見下ろすと、何台ものダンプカーが砂埃をあげていて、所々から白い煙が上がっているのが見られ、大きなゴミ捨て場であったことを覚えています。また、第五福竜丸については 1950 年代の中ごろ、遠洋漁業先のビキニ環礁において米国の水爆実験によって被爆してしまい、漁獲したマグロが放射線で汚染されていたため捨てられ、乗組員の久保山さんも放射線被曝で亡くなつた・・・・、程度の事は知っていましたが、その第五福竜丸がなぜこの夢の島で展示されるようになったのか、について調べてみたら、焼津港に帰還し放射線被曝検査を受けてから糸余曲折を経て 1967 年には廃船となり、使用可能な部品が抜き取られた後、夢の島の隣の第十五号埋立地に打ち捨てられているのを都職員らによって再発見されて保存運動が起り、東京都によって夢の島公園の「第五福竜丸展示館」を造って永久に展示されることになった、と言うことでした。

前置きはさておき、当日はだいぶ色付き始めた

銀杏並木を後に、マイクロバスは運転してくれる岡上さんを含め 15 名で予定通り 8 時に出発する。先ず本日の実行委員からこのツアーの趣旨説明の後、マイクが川口さんに渡され、大変貌を続ける武蔵小杉付近の説明と旧中原街道についての話を聞きながら丸子橋を渡る。都内に入つても日曜日の朝とあって道はすいていて車は順調に進み、五反田から高輪・芝を通ってレインボーブリッジを渡つて、夢の島にある第五福竜丸展示館に到着したのは、まだ 9 時少し過ぎでした。

展示館に入ると古ぼけた木造船のスクリューと舵が目の前に迫つてきました。これがあの第五福竜丸でした。係員の説明を受け船体を一周して 2 階に上がると全体が見渡せ、こんな小さな船で日本から 4500 km も離れたマーシャル諸島まで良く行かれたものだと感心させられたのと、第五福竜丸以外にも数多くの漁船と貨物船や商船が放射線を浴びさせらされましたことを改めて知らされました、館内を出ると「原水爆の被害者は わたしを最後にしてほしい」久保山愛吉の碑があり、目礼をして次の目的地、築地に出発しました。

築地市場には 11 時半には到着しましたが、駐車場が無くて市場の周りから浜離宮の入り口まで探しに行っても見つからず、しかたなく波除神社の前に車を止めて川口さんがお店探しのために先に下り、暫くすると腕を上にあげて丸を作り OK の合図をしてくれた。しかしこの



マグロ塚

放射線汚染により廃棄されたマグロの供養

場所は駐車禁止のため岡上さんには車に残ってもらい、12名で案内のお寿司屋さんに入った。店は私たちだけで貸し切り状態になり和気あいあいで美味しい握り寿司を食べることができました。すっかり満足して食後の運動のためにと波除神社に向かっているとき、先ほどのお寿司屋のおかみさんが自転車で駆け寄ってきて「間に合ってよかったです」と、岡上さん用に注文しておいたお寿司を届けてくれました。皆さん自分はお腹一杯になってしまったので、他人の事は忘れてしまったと言う、とんだハプニングに一同で大笑いした

場面もありました。車中で待機してもらった岡上さんに特注のお弁当を食てもらっている間に、おかげ様で私達は波除神社を参拝することが出来ました。

午後は東京大空襲・戦災資料センターの展示品見学と映像・体験者の話を伺ったが、この会館が公のものではなく、民間の募金と一篤志家からの土地無償提供によるものと聞き、こんなことでいいのかと考えてしまった。

次に訪れた北砂の妙久寺には、黒く焼け焦げたような墓石が幾つもありましたが、大きな「戦争殉難者供養碑」には心ある人によって、綺麗なお花が生けられていました。

今回のコース最後の訪問先は大綱町公園の東京都慰靈堂でした、堂内が工事中で幕が張られていて奥の方は良く見ることはできませんでしたが、川口さんの説明によると堂の中央には天災による「震災遭難者靈位」と、人災による「戦災殉難者靈位」の位牌が一緒に並んでいるそうで、これを聞いて自分に「どう思うか」と質問してみました。

薄暗い堂を出て「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」上部にある都内の小・中学生が描いたと言う綺麗な花壇を見て、心のすぐわれる思いをしました。

慰靈堂を最後に、余韻を残しながらバスは日吉に向かい、多摩川を渡るとき西の空が夕焼けに染まり、慶大の銀杏並木に到着したときには、秋の日は早くも暮れかかっていました。

報告

日吉フェスタ2014に参加して

運営委員 小山信雄



雨の中ガイドする小山さん

11月1日(土)、今年で8回目を迎える日吉フェスタに参加。今回も13時と14時の2回の日吉キャンパスミニツアーを企画し、昨年より充実した内容で多くのお客様を案内しようと張り切っていましたが、あいにくの天候。昼前からは雨脚も強くなり、ツアーが出来るのかと暗い気持ちになりましたが、とにかく人集めをしようと、全員で雨の中を声掛けに走り回った結果、合計8人が参加してくれました。13時の部は御夫婦と男性の3名で、遠藤さんと私が御案内。2偉人の銅像と、地上の戦争遺跡を出来るだけ回ろうと、やや速足のツアーとなりました。先ずは、人事局地下壕入口を見学し、理工坂の階段を上

って、第一校舎、待避壕跡、チャペル、耐弾式堅穴坑と弥生式堅穴住居跡を案内。そして最後に連合艦隊司令部地下壕出入口前で、地下壕の内部の話や、蝮谷体育館の建設時に航空本部地下壕出入口が発見されたこと、昨年春の破壊の事やマスコミ取材のエピソードなどの説



お寿司を届けてくれたおかみさん感謝感謝

明を行いました。今回は今までやつていなかったガイドも経験でき、とても良い勉強になりました。ツアーツの途中で雨もすっかりあがり、2か所の階段の上り下りもありましたが、参加者の皆さんが健脚で、時間内に終了できました。

報告

日吉フェスタ・ミニキャンパスツアーハイ

運営委員 上野美代子

あいにくの雨で、キャンパスツアーハイに参加される方がいないのではないかと思っていましたが、時間になって、4名の方が来てくださいました。

福沢諭吉像から出発し、藤山記念館、理工坂の人事局地下壕跡、第一校舎を通り、まむし谷をくだり、地下壕入口へ、そしてチャペルから耐弾堅穴抗まで、約一時間歩きました。

少ない人数だったので、雑談しながら歩き、説明にも熱心に耳を傾けてくださいり、とても感激でした。

地下壕の中には、入らないツアーハイでしたが、説明を聞いてくださる中で想像を、働かせていただくことも大切だと、感じました。

新米ガイドとしてはとても良い体験になりました。

次は良い天気でありますように。



昨年度ガイド養成講座修了生の
ガイド(上野さん)

報告

平成26年度地域のチカラ応援事業中間報告会の報告

運営委員 小山信雄



日吉台地下壕展示ポスター

11月15日(土)慶應義塾大学“来往舎”にて“地域のチカラ応援事業中間報告会”が開催されました。構成団体54の内、今回発表したのは6団体で、該当活動がこれから本格化する日吉台地下壕保存の会は、来年3月の最終報告会での発表となるため、今回は他の団体のお話をじっくり聴く事となりました。

「港北図書館友の会」からは、港北区内在住の作家や専門家による講演会の内容の報告があり、「港北ふるさとテレビ局」からは、将来の貴重な財産にするための映像の記録保存活動の報告などがあり、推進懇話会委員の方々よりの激励のお言葉や、質疑応答が行われました。報告会のあとは、“スターウォーズ・カフェ”という、参加者全員(50名程度)による交流イベントがありました。5つのテーブルにそれぞれのお題があり(何れも「まちづくり」に関するテーマ)、各人が意見を出し合しながら、3つのテーブルを移動して、いろいろな方との意見の交流や親睦を深めようというものです。私達の会としては「大学とまちづくり」が一番関心あるお題でしたが、「両者の連携はどうあるべきか」はこれから深めてゆくべきテーマと感じました。

3時間半とやや長丁場ではありましたが、港北区内で様々な団体が連携し合っている実例も、知ることができたことは大きな収穫でした。

聞き取り調査

連合艦隊司令部元電信兵大島久直さんからの聞き取り

親元離れ、さみしくてつらかった少年兵

聞き手・山田譲、山田淑子（文責・山田譲）

【10月25日の定例見学会に、元海軍電信兵の大島久直さんが奥様と一緒に参加されました。その時にお聞きしたお話を掲載します。大島さんからはその後、体験談を記した長文のお手紙をいただきましたが、これは改めて掲載したいとおもいます。】

日吉の見学会のことは、息子が「新聞にこういうのが出ているよ」とおしえてくれたので申し込んで参加した。1930年2月生84歳。1944年2月に高等小学校を繰り上げ卒業し、海軍を志願して合格。茨城県の下妻駅から「万歳、万歳」で送られて、山口県の防府通信学校に3月入隊した。田舎者で列車に乗るのも初めて、電話をかけたこともない14歳の子供だった。

通信学校は本来は2年で修了だが、半年で修了した。夏は5時起き、冬は6時起きで上半身裸で走らされた。ハンモックで寝た。カッター競争で負けるとごはんを食べさせてくれない。ごはんをすてさせられた。なにかというと、軍人精神注入棒（木の棍棒）で尻打ちの懲罰をされた。最高20回やられたこともある。初めての時は2間（3~4m）とばされた。いじめもあった。逃亡した人もいた。懲罰や教練は我慢できても、親元を離れてさみしくてそれが一番つらかった。

横須賀の海兵団に9月に仮入団して巡洋艦高雄の修理待ちで待機した。その間、海兵団の地下壕の穴掘りで4ヶ月位いた。18歳から14歳の15人の班で自分は最年少でつらかった。高雄は直らないので1945年2月位に日吉の連合艦隊司令部に来て5月までいた。その後は奈良県の大和航空隊に行き山の中腹で通信兵をやった。米軍のグラマン艦上戦闘機の機銃掃射をうけて、小石を頭にのせてしのいだ。軍帽だけで鉄兜はなかった。電信兵としての仕事は日吉とかわりなかった。終戦後9月に復員した。三等兵だったが終戦で二等兵。給料は30円位で安かった。

日吉では地下壕内の電信室は電信兵が15~20人いた。6時間勤務で4交代だった。休みは1週間に1度半日だった。壕の外にカマボコ兵舎があった。わら布団と毛布3枚で寝た。食事は腹一杯にならない。食器に盛り切り、いつも腹をすかせていた。受信機は（92式特改4の写真を見せると）これを使っていた。周波数のダイヤルを気を付けて合わせる。電鍵、レシーバーも（写真の）これを使っていた。蛍光灯は受信機の上の壁にあり、天井にもあった。20Wのもので長さ30cm位だった。司令長官は1ヶ月に1回位しか降りてこなかった。

特攻機から「いまから自爆する」という生電文が入ったりした。最後はツーと電信音を出しっぱなしでそれがとぎれる。かわいそうになった。戦艦大和の最後はわからない。通信室の天井の鉄パイプやアンテナとかもわからない。地下壕内のトイレは覚えていない。電信室と宿舎を行き来していただけで外のことはよくわからない。宿舎にいくのに砂利道を上がつていった。第一校舎の建物は覚えている。日吉の駅はもっとみすぼらしかった。



大島久直氏

シリーズ わがまち港北 第188回

日吉台地下壕の現在・過去・未来 一終戦秘話その17—

林 宏美(大倉精神文化研究所職員)

今年で終戦から69年目を迎えます。港北区内には戦争中に日本軍が使用した施設が数カ所あり、これまでにもご紹介してきました。その中でも著名なものは、日吉の慶應義塾大学敷地内に造られた連合艦隊司令部地下壕でしょう。軽巡洋艦大淀おおよどに設置されていた連合艦隊司令部は、昭和19年(1944年)9月に日吉に移転しました。レイテ沖海戦や沖縄での菊水作戦、戦艦大和の海上特攻命令などが日吉から下されたことは以前に書きました(第20回参照)。

この日吉台地下壕は、昨年3月、民有地部分にあった出入口が宅地開発によって破壊されてしまいました。貴重な遺構の一部が突如始まった工事によって失われた事は新聞各紙やテレビ番組等でも報道され、注目を集めました。残っていた4つの出入口のうち、1つは擁壁によってふさがれてしまいましたが、その後の工事は進んでおらず、残り3つは現状を留めているようです。戦争を後世に伝える手段が、人から物へと移行しつつある中で起こったこの問題は、近代の戦争遺跡を保存する難しさを私たちに改めて突きつけました。一度失われたものは二度と元に戻すことが出来ません。戦争遺跡を文化財として保護する動きは遅々として進んでいませんが、これ以上の破壊が進まないよう、日吉台地下壕以外の戦争遺跡を含め、全国で保存措置を早急に進めていくことが望まれます。

日吉台地下壕に関する話題としていまひとつ紹介しておきたいのが、慶應義塾大学の安藤広道先生を中心に進められた戦争遺跡に関する研究プロジェクトです。このプロジェクトは、慶應の日吉キャンパス一帯の戦争遺跡に関する調査、研究とその成果の活用に向けた基盤づくりを目的としたものです。平成23年度から25年度の3カ年計画で進められ、今年の3月に研究成果報告書『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究』が刊行されました。

プロジェクトでは、日吉キャンパス内にある連合艦隊司令部地下壕を中心とする地下壕群、箕輪町みのわちょうにある艦政本部地下壕、その他日吉付近の小規模地下壕のうち、入ることが出来る地下壕や現存する遺構等を全て測量調査しています。地下壕の中には現在は入れない個所や、破壊、撤去されてしまった個所もありますが、過去の調査成果等も踏まえて可能な限りその全体像を提示しています。地下壕に入ったことがない方でも、報告書に掲載された調査写真を通して戦争末期の海軍中枢機関が活動していたのが一体どのような場所だったのかを見るだけでも価値があると思います。

そして報告書には、過去に行われた関係者の聞き取り調査や執筆した手記の概要、掲載紙などをまとめたリストも掲載されています。このリストが今後の新たな研究成果と過去の研究成果の蓄積を結ぶ架け橋になることでしょう。報告書は港北図書館や、大倉精神文化研究所附属図書館にありますので、是非ご覧下さい。

ちなみに、筆者も報告書からひとつ発見をしました。第170回で、慶應義塾大学の日吉キャンパスで撮影された映画「あいつと私」をご紹介しました。昭和36年(1961年)に公開されたこの映画には、当時の日吉キャンパスの銀杏並木や校舎などの施設が随所に写っており、ストーリー以外の部分でも興味深い所が多いのですが、映像の中には地下壕の付属施設であるキノコ形の堅坑いちはうが2基写っています。堅坑は現在、テニスコートの脇に連合艦隊司令部地下壕のものが1基だけ残っており、実際に見ることが出来ます。筆者は映画の中に写っている2基

の堅坑は、現存の堅坑と同じもので、どちらか1基が過去に撤去されたのだと思っていました。しかし、報告書を見ていくと、テニスコート脇の堅坑はもともと1基しかなく、その一方で連合艦隊司令部地下壕に隣接する航空本部地下壕の堅坑が2基並んで存在していたことがわかりました。この場所は東海道新幹線の日吉トンネルの真上で、現在は慶應の自動車部練習場になっています。2基の堅坑は昭和50年(1975年)に行われた地上構造物撤去工事で失われてしまいました。その存在が確認

出来る映画の映像は、今となっては非常に貴重なものといえるでしょう。

さらに日吉に関する話を続けます。中目黒にある防衛省防衛研究所には、陸海軍人の戦争中の日記や、戦後に記した手記などが多数所蔵されています。その中には、日吉の地下壕で活動していた軍人の手に拵る記録も含まれており、連合艦隊司令部が日吉に移転した際に司令長官だった豊田副武の日記などもあります。

豊田は昭和19年5月3日から翌年5月29日まで連合艦隊司令長官を務めました。彼がその任を離れ、日吉を後にした日は奇しくも横浜大空襲当日にあたります。豊田の日記には司令部の日吉移転や横浜方面の空襲に関する記載もありますので、次回はそのご紹介をしましょう。

(次号に『第189回日吉台地下壕の現在・過去・未来 一終戦秘話その18—』掲載予定)
本会報P.14に『わがまち港北』を集録した本を紹介してあります。

ガイドから一言

「海外留学生をガイドして」

運営委員 長谷川崇



ガイドの話を聞く留学生

耐弾式堅穴空気坑の前で全員がようやく話を聞く状態になり見学会は終わりました。今後の問題として我々ガイドと通訳との詳細について、事前に打ち合わせが必要であると痛感した次第です。



現在は壊されて見ることの出来ない
2つの耐弾式堅穴坑

11月7日(金)午後1時より慶應大大学院メディアデザイン研究科の海外留学生25名(日本人学生15名)の案内をしました。私としては2回目の留学生ガイドで今回は佐藤千尋(慶應大特任助教)の通訳により事前に作られたガイドマップを使用してガイドダンスが始まりましたが一部の学生を除き何か良く話が通じがたく不安のままスタートしました。

特に地下壕では写真を撮るもの、案内を聞くとしない学生が多く全員に通訳の話が届かず、集中力の欠いた参加者の様子が續き地下壕を出ました。地上に出てからチャペル、そして

連載

日吉第一校舎ノート (6) 鉄筋コンクリート打放し

運営委員 阿久沢 武史

中條精一郎の「壮大なパルチー（根本方策）」と「願望」を投影した建築として、若き網戸武夫は、どのような学び舎を作ろうとしていたのか。

網戸は、昭和3年（1928）に曾禰中條建築事務所に入り、昭和11年（1936）に退所しているから、その在籍期間は短い。この間の彼自身の仕事に関して、その著『建築・経験とモラル』で次のように述べている。

もちろん、曾禰・中條建築事務所では公共や銀行などではなく、住宅の設計もしていましたが、これは、宮家や伯爵家の、何千坪の敷地に何百坪の家を建てるというような、大変立派なものばかりで、これは、上の人気がきちんとやる。とても、私のような若造が住宅に手を差入れるようなことはできません。ですから、この事務所で私は住宅の設計は一軒もやる機会を持ちませんでした。唯一、私が曾禰・中條建築事務所時代にした仕事というのが、1934年（昭和9年）の慶應日吉台の全体計画と予科第一校舎です。これは様式から離れて、鉄筋コンクリートという素材を使って、可能な限りの建築表現を果たしたものです。

第一校舎は鉄筋コンクリート造である。昭和8年（1933）10月の『三田評論』（第434号）「日吉建設工事の概要」には、予科校舎（第一校舎）の「構造及び仕上概要」が、次のように記されている。

地形及び基礎 割栗地形の上に鉄筋コンクリート基礎とす

軸部及び床 柱、梁、壁梁、壁、床版共総て鉄筋コンクリート造とす

外壁仕上 コンクリート打ちその儘とし白セメントスプレー吹付け（ウォーガン）

仕上げとす 各出入口階段は稻田産花崗岩小叩き仕上げ裾付けとす

（以下、略）

工期は、昭和8年（1933）3月15日に起工、昭和9年（1934）5月31日に竣工、設計並びに監督は曾禰中條建築事務所であり、建築一般請負は上遠合名会社（上遠組）であった。その建築面積は、

一階 3,518.96 m² (1064.485坪)

二階 3,394.16 m² (1026.733坪)

三階 2,689.72 m² (813.640坪)

屋階 236.28 m² (71.475坪)

地階 237.67 m² (71.895坪)

総計 10,076.79 m² (3048.228坪)

教室は、

小講堂 1 352席 大教室 11 各 121席 教室 51 各 52席

であり、建築面積は3000坪を超える、100人規模の11の大教室を含んだ計62の教室、これに352人を収容できる小講堂を加えた、当時の学校建築としては非常に大きな建物である。

『慶應義塾百年史』によれば、建築費は52万2476円4銭、これに付帯工事費11万8879円38銭と設備費2万945円47銭をあわせると、計66万2399円89銭であった。ちなみに昭和9年の蕎麦（かけそば）は10銭、平成18年（2006）で510円であることから（森永卓郎監修『物価の文化史事典』展望社）、これを基準に現在のおおよその費用を推定すると、第一校舎の建築費総額は約33億7800万円ということになる。

曾禰中條建築事務所は、この大規模な建物の設計に関わる一切を20代の新進の建築家・網戸武夫に任せた。網戸は『建築・経験とモラル』の中で、「誰の手も借りずに、私一人の担当」になり、「造形的な面ばかりでなく、仕様書も構造も、積算も、それから材料の選択から現場監督まで、全部自分から進んで関与しました」と言う。これはすなわち師である中條精一郎

の方針に他ならず、網戸自身も後に大変恵まれていたと述懐するように、このような自由闊達な職場環境の中で、「鉄筋コンクリートという素材を使って、可能な限りの建築表現」を果たそうとしたのである。

日本における鉄筋コンクリートの歴史は、決して古くはない。最初の本格的な建築は明治44年(1911)の三井物産横浜支店が最初と言われ、その後、丸の内のオフィスビル群に徐々に建設されていく。ただ、大正期を通して、この時期のオフィスビルの主流は鉄骨造であった。その様相が一変したのが、大正12年(1923)の関東大震災である。鉄骨造のビルが震災で大きな被害を受けたのに対して、鉄筋コンクリートは揺れにも火にも強かった。そのため震災復興の過程の中で鉄骨造は使われなくなり、昭和初年のこの時期は、オフィスビルのみならず、学校や病院、役所・橋などの公共建築などに鉄筋コンクリートが進んで採用されていった。網戸が第一校舎を設計したこの時期は、まさにそうした時代相の中にあった。

藤森照信によれば、建築家にとって鉄筋コンクリートが何より魅力的だったのは、「何にでも化けうる変幻自在の材料」としての新しさだった(『日本の近代建築(下)』岩波新書)。仕上げで石を積めば石造に見え、煉瓦を張れば煉瓦造に見え、コンクリートだけの場合は型枠通り平面にも凸凹にもなる。網戸が第一校舎の設計にあたって鉄筋コンクリート構造を選んだのは、一つには震災以後の学校建築に必要な耐震性の問題があるだろう。それは時代の要請によるものである。しかし、網戸はその選択に彼自身の建築家としての「冒険」を秘めていた。後に自らの処女作を評して、「汗と野心にたぎった泥まみれの作品」と述べているように、鉄筋コンクリートという新しい素材との格闘と挑戦がそこにあったのである。

第一校舎の建設にあたって、網戸が選んだ外部仕上げは、重厚な石積みでも煉瓦張りでもタイル張りでもなく、コンクリート素材そのままの「打放し」であり、「白セメントスプレー吹付け仕上げ」であった。これは『建築・経験とモラル』で網戸が自ら語るように、当時としては画期的なことであり、日本ではまだコンクリート打放しで公共建築を造るという時代は来ていなかった。わずかにアントニン・レーモンドが、大正13年(1924)に自邸レーモンド邸でコンクリートのざらざらした表面そのままの斬新な外壁を世に問うていた程度に過ぎず、学校建築での施工例はきわめて少なかった。網戸はコンクリートの壁面に、むき出しの地肌そのままではなく、白セメントのスプレーを吹き付けた。その結果、明るくて清潔な、青年の夢を育む場にふさわしい白亜の学び舎を現出させることになったのだが、そこには新しい学園を建設するに際しての網戸のこだわりと「冒険」があった。

私はコンクリートの素材性と可塑性、それと経済性、それから学園であるということから、仕上げ材に化粧をしないという思想が建物の過度なコマーシャルを省き、学園としての機能性を素材のまま実現しようと考えた。実施に当たり、実現に向けて、中條先生や曾禰先生に設計、説得して、あれだけの冒険をさせてもらったのです。

この試みは、曾禰中條建築事務所としても前例がなく、日本においても例がなかった。日本ではまだこれほど大掛かりな鉄筋コンクリート打放し仕上げの施工例がなかったため、アメリカから関係資料を取り寄せ、コンクリート打放しの技術や型枠などの施工法に関して研究した。それは施工業者(上遠組)にとっても初めての経験であった。アメリカでは仮枠にベニヤを使っていたが、日本にはまだベニヤがなかった。そこで型枠は松の八分板合板にし、木目を出すために荒縄タワシでこすり、酸液で表面を洗浄し、松の表面の質感の目立てをした。年輪を起こし、年輪と年輪の間を浮き立たせると、美しい板目が表れる。その型枠にコンクリートを流し込んだのである。ただ、専用の機械の不足からコンクリートの充填や型枠とのなじみがうまくできないため、作業員が竹竿を使ってコン



型枠の跡 (正面玄関付近)

クリートを打ち込んでいったという。

これは現代と比べれば気が遠くなるような作業であろう。いずれにせよ、このような過程を経て第一校舎は徐々にその形を現していった。現在でも校舎の白い壁面のほとんどすべての箇所で、松板の型枠の跡がそのまま残っている。これもまた当時の建築技術の貴重な遺物であり、この建物のもつ「記憶」でもある。

《連載》地下壕設備アレコレ【13】 Z8工法と「コンクリートシュート孔」

運営委員 山田譲

日吉の地下壕が数か月の短工期で分厚いコンクリートづくりで築造されていたことは、私たちにとってもおどろきです。この短工期と耐弾性（強度）は、海軍設営隊の「築城」工事の要です。この短工期を可能にした新技術がZ8工法とよばれるボウリング技術であったことは、第5回（会報106号）第6回（108号）で書きました。

では地下30mに達する直径10~15cmの垂直穴をどのようにつけて、生コンクリートを地下の型枠の中に入れたのか？このことが春のガイド養成講座の中で議論になりました。私は型枠の真上にボウリング穴をあけて、鉄パイプで地上から直接流し込んでいたのだろうと考えていました。ですから今年7月の「平和文化」社発行のパンフレット『フィールドワーク日吉・帝国海軍大地下壕』の改訂で、旧来の記述のまちがいを直した時も、そのような主旨で書きました（同パンフ15ページ）。しかしガイド養成講座参加者の方から建築業界の人の話として、生コンクリートは一度、下におろしてから、それから型枠に流し込むものだということを言われました。

そう言われるとたしかに私のイメージしたやり方には無理があります。30mの落差で、生コンクリートを落としたら木製の型枠はこわれてしまいます。また1回に生コンクリートを流し込めるのはトンネル長で10m程度だろうと思います。地上なら型枠の好きな所に流し込めますが地下のトンネル工事では、流しめる位置は限られてしまいます。ボウリング穴から直接流し込むとすると頑丈な受け台で落下してくる生コンクリートを受けるにしても10mおき位にボウリング穴をあけないといけないでしょう。地下トンネルの全長にわたってそんなにいっぱいボウリング工事をするでしょうか。他方、素掘りのトンネル内に生コンクリートを仮置きする入れ物をおいてそこから型枠内に流し込むとしたら、これは手作業ですから、これはこれで大変です。とはいってこれが当時の普通のやり方なのだと思います。

現在のトンネル工事では、素掘りの壁に向かって速乾性のセメント（急結剤入りセメント）を吹き付け、そのあとで型枠を取り付けて生コンクリートを圧送ポンプを使って打設します。また軟弱地盤ではシールド工法を使いますが、この工法では生コンクリートの打設はしません。（コロナ社『鉄道技術140年の歩み』、彰国社『土木図解辞典』）

さて、日吉では型枠に地上から直接生コンクリートを流し込んでいたのか、否か？みんなはどう思いますか。日吉の地下壕をつくった第3010設営隊の伊東三郎隊長の回想記には「コンクリートの覆工の際、工程短縮上隧道線形上の任意の地表面からのコンクリートシュート孔」としてZ8工法を使ったと書いてあるだけです。（『海軍施設系技術官の記録』同刊行委員会編）

ところで伊東三郎元技術大尉はなんと私の小学校の同級生の父親でした。同窓会で会った時、日吉で戦争遺跡のガイドをしている話をしたら「自分の父親がつくった」というのでびっくりしました。ご本人はすでに他界されていましたが、同級生の話では自分のつくった地下壕が「負の遺産」と言われることが不本意だったようです。お気持ちはわかりますが、戦争遺跡は無用の長物であってもらわないと困ります。二度と戦争の役に立つことのないように私たちは努めたいものです。

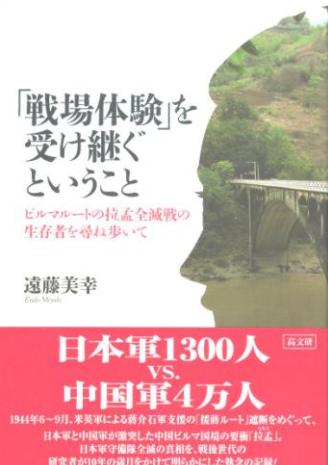
書籍紹介

日吉に関係の深い書籍の紹介



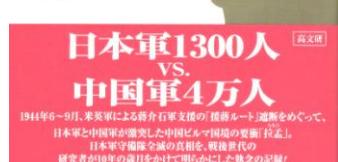
- 『大学における 戦没者追悼を考える』 白井 厚 著
慶應義塾大学出版会 2012年11月発行 定価 2500円+税

保存の会顧問でもある著者、白井 厚先生は1930年生まれの学徒動員世代です。社会思想史が専門ですが、「大学と戦争」についての研究を続け、出版や講演などの活動をしてこられました。この本は、帯にあるように「アジア太平洋戦争で大学はどんな役割を担ったか。大学の戦争責任と戦後責任を問う」ものです。

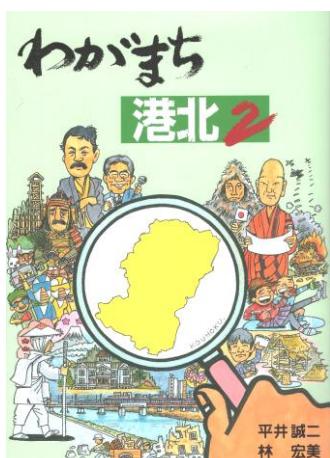


- 『「戦場体験」を受け継ぐということ』 遠藤 美幸 著
高文研 2014年11月発行 定価 2200円+税

遠藤美幸さんは1963年生まれの松村高夫門下の研究者で、地下壕保存の会の運営委員でもあります。子育てをしながらの研究生活の中から生まれたのがこの本で、多くの出会いが重なって「ビルマートの拉孟全滅戦」というあまり知られていない戦場が、活字になりました。



- 『わがまち港北』『わがまち港北2』
平井誠・林宏美著 2009年7月・2014年4月発行
定価 各1000円(税込み)



第1巻は大倉精神文化研究所専任研究員である平井誠二さんが、横浜市港北区の情報紙「楽・游・学」に1999年1月発行の第1号から毎月、港北区ゆかりの話題を読みやすく書いたものです。第1回から120回までが纏められています。第2巻は平井さんに、同研究所研究員の林宏美さんが加わり、121回から180回までが収められています。港北区の住人はいうに及ばず、来たことのない方にも読み物として、大変面白いものです。(連絡先 大倉精神文化研究所)

お知らせ

この度、毎年3月に川口重雄さんが田園調布学園で実施している恒例の見学会を、日吉台地下壕保存の会と協賛で行うことになりました。見学場所は以下の通りです。御希望の方は直接川口先生にご連絡ください。また詳細は同封の別紙を参照して下さい。

川口重雄 FAX 044-722-3184 メール：kawaguchi@chofu.ed.jp

	見学場所	実施日	申込締め切り
1	日吉台地下壕	2015年3月2日(月)	2015年2月27日(金)
2	靖国神社	3月5日(木)	2月27日(金)
3	陸軍登戸研究所	3月7日(土)	2月27日(金)
4	防衛省・新宿区内の戦争遺跡	3月10日(火)	※ 1月31日(土)
5	第5福竜丸	3月11日(水)	2月27日(金)

★日常の活動より

見学者の感想

NTT 労組退職者の会東京支部協議会 西部会 小川卓夫

今回の「戦争遺跡見学」は日吉にある旧海軍が建設した地下壕です。

日吉に地下壕があることを知らない人も多いと思いますが、終戦4か月前にあの戦艦大和に沖縄への無謀な特攻命令を出した旧海軍の司令部の跡です。

日吉台地下壕保存の会の長谷川さん他4人の方々に10月3日、退職者の会29人が案内していただきました。

要所ごとに説明者が交代し、当時の状況を詳しく説明され、旧軍部の上層部に怒りをおぼえる話もありました。

古い建物を壊し、新しく建て替えをする現在ですが、大切なものはのこしておきたいです。今は世界遺産である広島の原爆ドームが、もし、高度成長期に取り壊され、跡地が高層ビルなどになっていたとしたら、原爆の恐ろしさも身に感じて伝わってこないかも知れません。負の遺産である戦争遺跡を保存し、そして学び、平和について語り合うことが大切に思います。

今後も「戦争遺跡見学」に、新たに会員になられた方も是非参加して共に考えましょう。

(西部会の機関誌より転載)



小学校の見学会



学習会



港北区地域のチカラ応援事業中間報告会



地下壕見学会

★活動の記録 2014年9月～11月

9/17 地下壕見学会 港北区ボランティアガイド企画 55名

9/19 会報117号発送(慶應高校物理教室)

9/26 地下壕見学会 ぶなの会 19名

9/27 定例見学会 64名

10/3 地下壕見学会 NTT労組退職者会 29名

10/5 ガイド学習会(菊名フラット)

10/6 地下壕見学会 コンフォール南日吉自治会

◆台風のため延期

10/8 地下壕見学会 港北区小学校社会科研修 36名

10/10 運営委員会(来往舎205号室)



地下壕の主 さわがにクン

10/16 地下壕見学会 日吉本町ケアプラザ 26名

10/20 地下壕見学会 日吉台小学校6年生・先生 105名

10/25 定例見学会 51名

10/26 東京の戦争遺跡バスツアー 参加者15名(第五福竜丸展示館—東京大空襲戦災資料センター—東京都慰靈堂他)

10/31 地下壕見学会 埼葛教育長協議会・むくの会 21名

11/1 日吉フェスタ(ヒヨシエイジ主催) 展示・書籍販売・キャンバスツアー

11/7 地下壕見学会 慶大大学院メディアデザイン研究科留学生他・神奈川県立歴史博物館職員 42名

11/10 日吉地区センター企画講座 ①「地域再発見 日吉台地下壕について」39名
(日吉地区センター)

11/11 運営委員会(来往舎205号室)

11/12 地下壕見学会 川崎市民館日吉分館 34名

11/15 地域のチカラ応援事業中間報告会(来往舎シンポジウムスペース)

11/17 地下壕見学会 草加市平和ネットワーク 21名

11/20 地下壕見学会 ②日吉地区センター 41名

11/22 定例見学会 64名 12月の港北図書館展示の準備作業(来往舎205号室)

11/24 ガイド学習会(菊名フラット)

11/27 地下壕見学会 みらくる会 20名

11/30 第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム現地実行委員会反省会(武蔵小杉 精養軒)

予定

12/5 会報118号発送(慶應高校物理教室)

12/1～28 港北図書館・日吉台地下壕保存の会共催事業 パネル展示「日吉台地下壕」
(港北図書館1F “港北まちの情報コーナー”)

☆定例地下壕見学会 12/13(締切りました)・1/24・2/28・3/22 毎月第4土曜日(原則)

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで **TEL 045-562-0443** (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会